

堂庭遺跡・岩地藏遺跡追加指定答申記念

令和4年度伊達市歴史文化講演会

伊達の魅力

—歴史から探る！—

2023年1月

伊達市教育委員会

令和４年度伊達市歴史文化講演会

「伊達の魅力 ―歴史から探る！―」

日時：令和５年１月２１日（土）１３：００～１５：３０

場所：伊達市立梁川小学校 講堂

プログラム

１３：００～ 主催者あいさつ 教育長

【第１部】

１３：０５～ 伊達の歴史紹介：生涯学習課職員

１４：１５～ 休 憩

【第２部】

１４：３０～ パネルディスカッション

パネリスト：伊達市長 須田博行

伊達市ふるさと大使

高島 英也 さん

長沢 裕 さん

小林 アリス さん

コーディネーター：飯村 均氏さん

（伊達氏梁川遺跡群保存活用計画策定委員会委員）

１５：３０ 閉演

伊達の魅力 ―歴史から探る！―

第1部 伊達氏と伊達地方

この伊達の地は、後に仙台藩祖伊達政宗^{せんたいはん そ だ て まさむね}を輩出する伊達家と深い関りを持った地です。伊達の地に残された多くの史跡が中世伊達家の歴史と関係しながら築かれたものです。また、この伊達地方には、多くの中世伊達氏に関連する遺跡が登録され、重要なものについては、史跡として保護・活用が図られています。

そして、この史跡を見ていくと中世という不安定な社会を歩み、成長を遂げた伊達氏の姿が垣間見えます。

第1部では、伊達の地の残された史跡から中世伊達家の歴史を振り返ります。

1. 阿津賀志合戦^{あ つ か し かつせん}と伊達氏（関連する史跡 阿津賀志山防塁跡^{あ つ か し や ま ぼうるいあと}）

平氏追討を果たした源頼朝は、広大な北の地を支配する奥州藤原氏攻めを決行します。平安時代に終わりを告げ、鎌倉時代の始まりとなる合戦の最大の舞台が現在の国見町にある阿津賀志山防塁でした。

文治5年（1189）2月に、源頼朝は、地方の武士に平泉藤原氏追討のため軍事動員を命じます。その内容は、7月10日までに鎌倉に参集を促すものでした。

7月17日、頼朝は、朝廷の命令がないまま奥州へ進軍を行います。鎌倉に参集した1万程の武士を3軍に分け進軍したと『吾妻鏡』は伝えています。奥大道を源頼朝が、東海道を千葉常胤・八田知家、北陸道を比企能員などが率いたとされます。頼朝の本軍は、奥大道を北上し8月7日に阿津賀志山の麓、国見駅に陣を構えたとされます。

この頼朝軍の進軍に備え、藤原氏は、国見阿津賀志山中腹から阿武隈川まで約3kmに渡り巨大な堀と土塁を築きました。これが史跡阿津賀志山防塁跡です。

『吾妻鏡』には、「阿津賀志山に城壁を築き要害を固め、国見宿と彼の山との中間に、俄かに口五丈の堀を構えて、逢隈河の流れを堰入れて柵とした」と記されています。

昭和46年に実施された発掘調査では、この阿津賀志山防塁の姿が明らかとなりました。確認された防塁跡は、二重の堀と三重の土塁で構成され、その幅は、25m程度となることが確認されました。1本の堀の幅は、6m程で深さは2mに達しています。

このような形状の防塁を阿津賀志山中腹から地形に合わせながら旧阿武隈川ま

で約3kmに渡り構築していたことがわかります。阿津賀志山防塁跡は、平泉藤原氏が頼朝軍と対峙し、奥州合戦最大の激戦地となった歴史を伝えています。阿津賀志山防塁の陥落後、ほどなくして約90年に渡った平泉藤原氏の時代に幕が下りることとなります。

この時、この合戦で源頼朝に従った常陸の武士がいました。中村氏です。中村氏は、阿津賀志合戦とともに行われたとされる石那坂合戦において武功を挙げ、頼朝より伊達郡を与えられました。

中村氏は、与えられた伊達の地を姓とし、ここに仙台藩祖伊達政宗へとつながる伊達家が成立することとなります。

2. 南北朝時代の到来と伊達氏（関連する史跡及び名勝 ^{りょうぜん} 霊山）

鎌倉時代末期、気候変動による飢饉や蒙古来襲などの影響は、鎌倉御家人の鎌倉幕府に対する不信を増幅させ、ついには幕府の滅亡へとつながって行くこととなります。

討幕の中心的役割を果たした後醍醐天皇は、公家による政治の復活を目指します。この時、東北の地には、後醍醐天皇の皇子である義良親王と陸奥守に任じられた北畠顕家が派遣されます。16歳という若さでの抜擢でした。また、これより先に、足利尊氏が、鎮守府将軍に護良親王が征夷大將軍に任命されています。

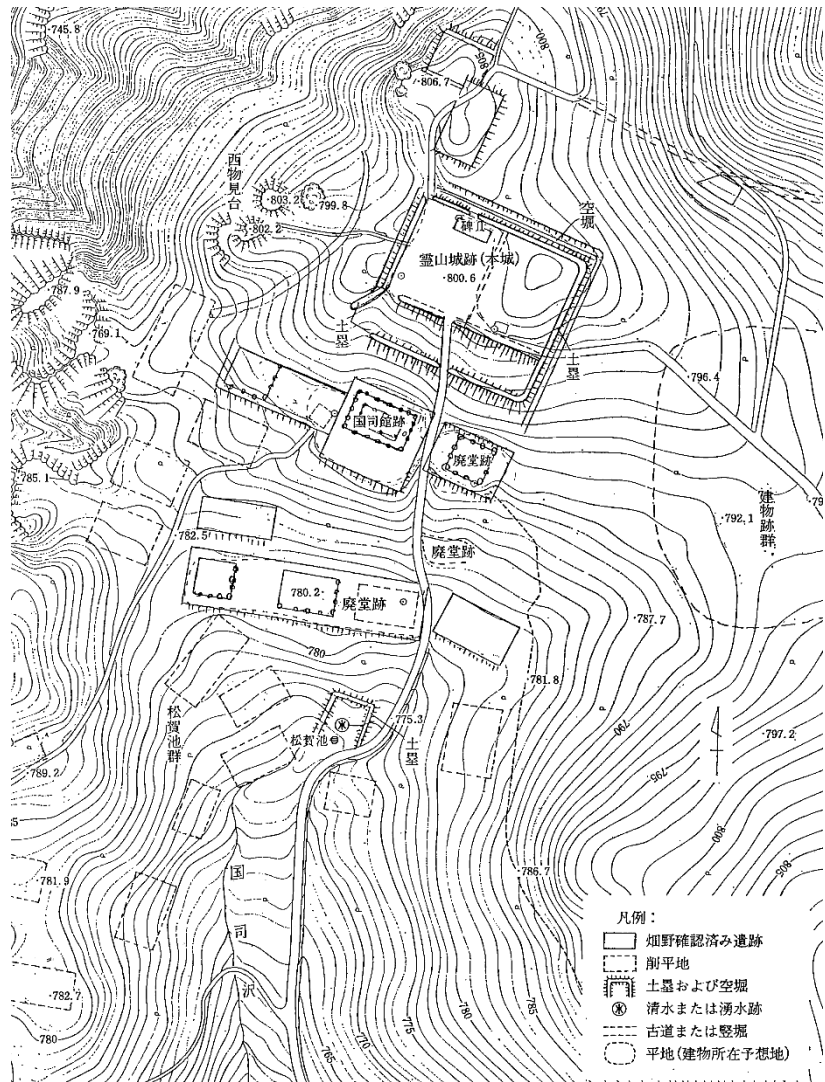
元弘3年（1333）10月、顕家は、後醍醐天皇の命を受け多賀国府（宮城県多賀城市）に入り、奥州の武士を束ねるため組織の再編に尽力します。義良親王の下、陸奥守として、式評定衆・引付・諸奉行を配置し、組織再編の鍵となる式評定衆には、結城宗広・親朝、伊達行朝などの地元の有力な領主が登用されました。

しかし、後醍醐天皇による中央集権的な方針に対し、所領安堵や様々な問題解決に遅れが出始めると武士たちは、次第に後醍醐に対し不信を抱くこととなります。これに乗じて旧北条氏勢力が挙兵するなど事態は、混迷を極めていきます。建武3年（1336）7月、北条時行は、信濃で挙兵し、鎌倉を手中にします（中先代の乱）。この時、足利尊氏は、後醍醐の命のないまま鎌倉を奪還し、建武政権からの離脱が明白なものとなっていきました。

この尊氏の動きは、東北の地にも大きな影響を与えます。足利尊氏の動きに呼応するものが多く現われます。これを機に尊氏は、斯波家長を奥州総大将に命じ、東北へ派遣、東北の支配強化を図ろうとしました。この混乱した情勢の中、顕家は、多賀国府を退かざる得なくなり国府を霊山へ移すこととなりました。

史跡及び名勝霊山は、平安時代から続く山岳寺院であり、北畠顕家の国府移転も霊山寺や霊山寺周辺に広がる伊達氏など南朝に協力的な勢力を頼った可能性が考えられています。

霊山の山上には、国司館と伝えられる礎石建物跡が確認されています。この周辺には、20以上の平らに削平された跡（平場）や礎石建物跡が5棟ほど確認されています。国司館跡は、南北2間、東西3間で四面に庇が付く建物です。また、国司館の北にある最大規模の平場は、寺院の中心的な建物となる根本中堂跡と考えられています。この付近からは、陶器の破片や硯、太刀などが採集されています。また、国司館跡北東の二ツ岩からは、青磁盤や青磁花盆が採集されています。これ



霊山山頂伽藍群遺構配置図

らの青磁は、14世紀前半代のもので陸奥国府移設の時機とも重なることから、陸奥国府の機能や文化を考える上でも貴重な資料と言えます。

しかし、国府移設後程なく足利方は、建武3年（1336）に川俣城（川俣町）・小高城（南相馬市）を攻め、霊山を包囲していきます。

東北の情勢が不安定になる中、北畠顕家は、奥州の再建を目指しますが、その暇も無く後醍醐の上洛命令に随い京へ派兵し、延元2年（1337）、鎌倉を攻めこれに勝利します。しかし、伊勢から奈良へと進み和泉国石津の戦いで命を落とすこととなります。顕家21歳のことでした。

北朝勢が勢力を増す中、南朝方の武士たちも次第に北朝へ転ずることとなり伊達氏も足利方へ転じ生き残りを図っていくこととなります。

3. 室町幕府と伊達氏（関連する史跡 むろまちばくふ 宮脇廃寺跡 みやわきはいじあと）

明徳3年（1392）、東北・関東が室町幕府の管轄から鎌倉府へ移ることとなります。これにより、関東の安定化を図るための出先機関の意味合いが強かった鎌倉府が、東日本の経営を行う独立した機関としての機能を持つこととなります。この決定は、東北の国人領主に大きな影響を与えていくこととなります。

奥州の鎌倉府への管轄移転により室町幕府と鎌倉府の確執が深まりを見せていきます。そのきっかけは、奥州の経営を強固にするため鎌倉公方が兄弟を奥州に派遣したことによりはじまります。鎌倉公方は、現在の福島県郡山市と須賀川市に自身の兄弟を派遣します。これに対応する形で鎌倉府の動きをけん制するように室町幕府は、大崎氏を奥州探題に任命し、奥州の安定化を図ろうとします。この結果、室町幕府と鎌倉府の確執が深まりを見せ、その構図が、奥州を舞台に展開する様相を見せていくこととなるのです。

この時、室町幕府との連携強化の姿勢をとったのが伊達政宗（伊達家9代当主）でした。その様子が史跡宮脇廃寺跡からわかります。宮脇廃寺跡の調査では、菊の花を模した文様の瓦が多数出土しています。この瓦は、「半裁菊花唐草文軒平瓦」といい、仏堂の軒先などを飾った瓦です。この瓦を見ると名前のおり菊の花を半分にした模様と左右に唐草の模様が描かれます。この菊の花があらわれた瓦は、京都の相国寺、鹿苑寺（金閣）などの発掘調査で確認され、これらの寺院は、将軍足利氏との深いかかわりの中で建立された寺院となります。このことは、伊達氏が、足利氏と足利氏に近い人々しか使えなかった瓦を使用できたことを意味しています。伊達氏が、室町幕府との結びつきを深めていった様子が理解できます。

伊達政宗は、石清水善法寺通清の娘（蘭庭禅尼）を正室に迎えています。蘭庭禅尼の姉は、足利義満の生母であり、この結婚からも伊達氏が、室町幕府との協調路線を深めていった様子がわかります。



宮脇廃寺跡出土半裁菊花唐草文軒平瓦

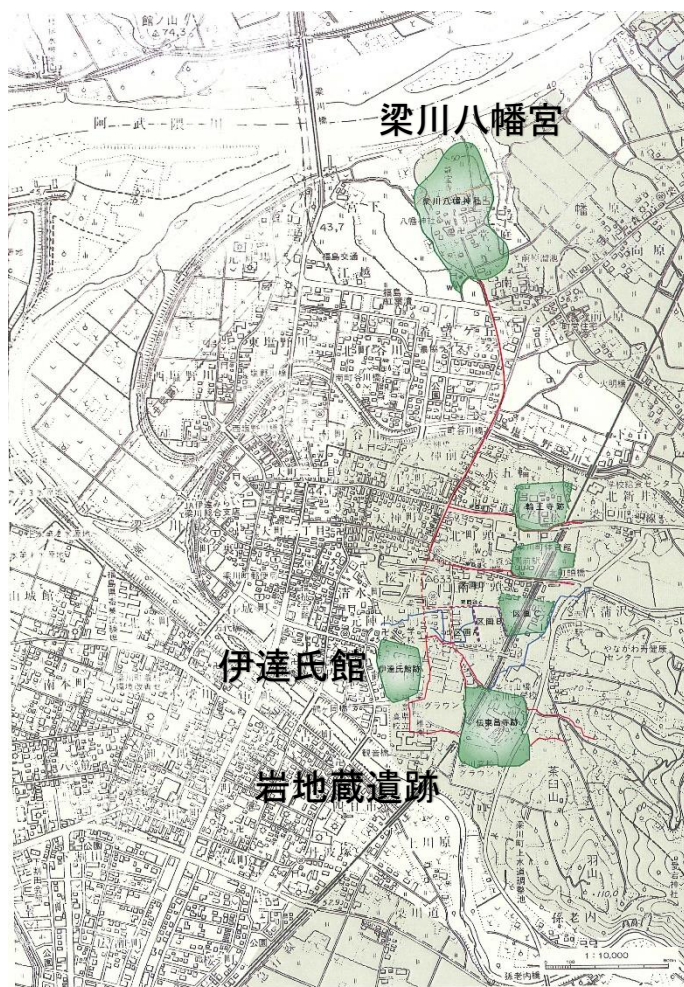
4. 戦国大名伊達氏の誕生（関連する史跡 伊達氏梁川遺跡群）

鎌倉公方足利持氏が、室町将軍の座を狙う思いを抱いたこともあり、室町幕府と鎌倉府の確執は、15世紀に入ると更に激しさを増していきます。この情勢の中、幕府との連携を深め奥州での伊達氏の立場を引き上げ大名への足掛かりを作った人物が伊達持宗（伊達家11代当主）でした。

正長元年（1428）、将軍足利義教より、篠川殿足利満直、伊達・蘆名・白河・石橋・懸田・岩城・岩崎・標葉・檜葉・相馬等に御教書が発給されています。また、同じ年に足利義教より出された伊達持宗宛ての御内書では、篠川の足利満直に従い、鎌倉公方足利持氏討伐の際には出陣するよう命じており、これらの内容からも伊達持宗が室町幕府と直接主従関係を結んでいた京都御扶持衆であったことがわかります。この様に伊達持宗は、室町幕府との連携を深め伊達氏の立場を引き上げていきましたが、これと同時に本拠となる館と都市の整備も進めた人物でした。この伊達持宗が築いた中世都市が史跡梁川遺跡群です。

中世都市梁川の構造は、阿武隈川に面した北端に八幡宮（梁川亀岡八幡宮）を配し、南端となる広瀬川に面した箇所に伊達氏館・伊達家筆頭寺院となる東昌寺・摩崖仏群（岩地蔵遺跡）を配置しています。北端と南端に宗教施設を配置しています。八幡宮と摩崖仏の間に伊達氏館や寺院・屋敷跡などが設置されたと考えられます。特に八幡宮、東昌寺や輪王寺といった社寺は、伊達家にとって重要であり、現在仙台市に北山五山として移設された歴史を持つものです。

その後も室町幕府との連携を重視した伊達氏は、歴代当主の京都上洛なども行い、14代当主伊達植宗の頃には、館内部に庭園を設けるなど中世都市梁川の整備拡充は進められていくのでした。



中世都市梁川のイメージ

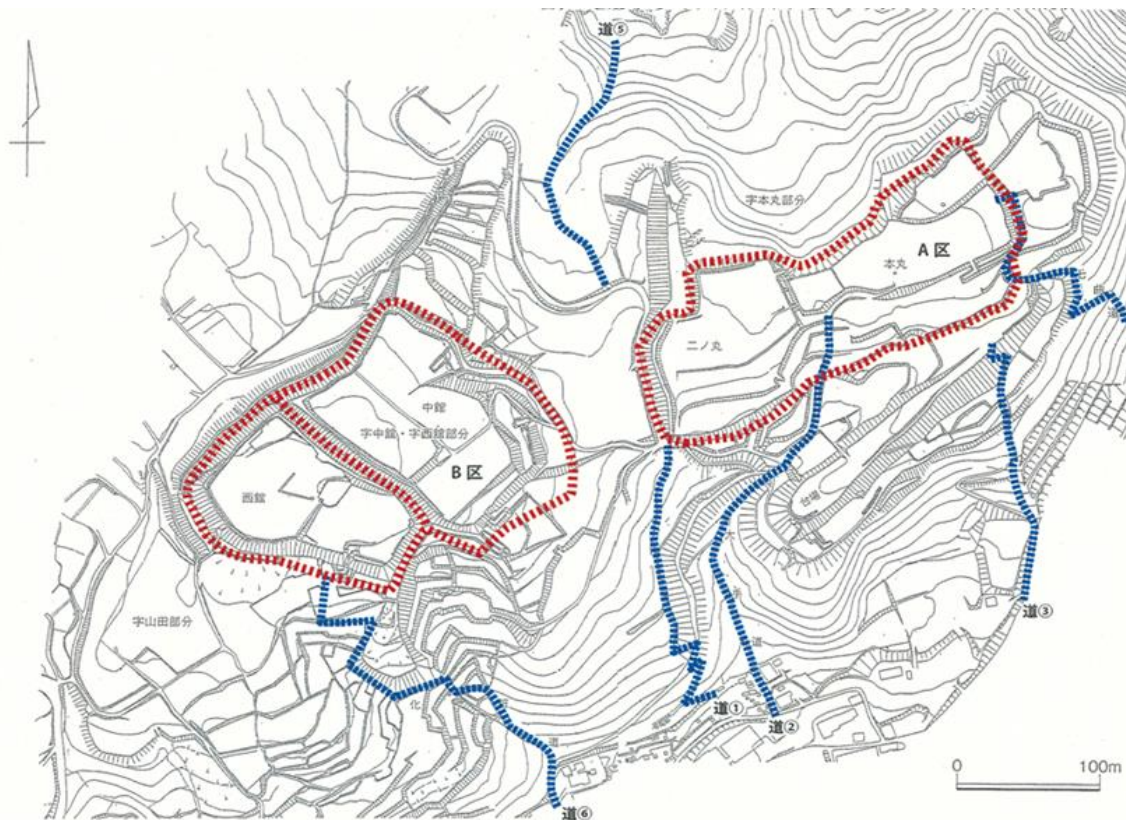
5. 天文の乱と伊達氏（関連する史跡 桑折西山城跡）

伊達植宗（伊達家 14 代当主）は、大永 2 年（1522）、陸奥国守護職に補任され、その後、精力的に領域経営の強化を図った人物です。天文 4 年（1535）には、税の徴収者を決め各家一軒ごとの税を取りまとめた『棟役日記』を制定し、翌年には、分国法となる『塵芥集』も制定しています。この他、天文 7 年（1538）には、田畑の面積を調べた『段銭帳』の製作も行っている。

領内での法制度を整備し、税の徴収システムを整えるといった植宗の意欲的な内政強化政治姿勢を読み解くことができます。また、奥州探題である大崎氏や隣国の国人領主（相馬氏、蘆名氏、二階堂氏、田村氏、懸田氏、葛西氏など）と姻戚関係を結び外交政策の礎も築いています。

この様に名実ともに奥州の大名となった伊達植宗は、梁川から郡西山への本拠移転を決めます。これにより築かれた守護館が桑折西山城跡です。

梁川の伊達氏館との大きな違いは、山中に館跡を設置した点です。山城を核にした本拠地の移転や先に述べた法整備の積極的な動きも伊達植宗の大名化の動きとみることが来ます。しかし、このような積極的な動きの反動は、南奥州の国人領主を大きく巻き込んだ天文の乱を招き、桑折西山城跡は乱の終結後程なくしてその役割を終えることとなります。



桑折西山城跡 区画推定図

桑折西山城跡の構造 桑折町教育委員会提供図に加筆

第2部 明治の到来と伊達の^{さんしぎょう}蚕糸業

(関連する重要文化財 ^{だ て}伊達の^{さんしゅせいぞうおよ}蚕種製造及び^{せいし}製糸・^{ようさんかんれんようぐ}養蚕関連用具、^{きゅうかめおかけじゅうたく}旧亀岡家住宅)

伊達地方の基幹産業であった蚕糸業。その中でも江戸時代後期から精力的に進められた伊達地方の^{さんしゅせいさん}蚕種生産は、明治以降の生糸輸出に多大な影響を与えていきます。また、伊達地方の養蚕・生糸生産の技術は、明治期の日本の近代化へ寄与していくこととなります。

また、ここに至るまでには、伊達地方に生きた養蚕家・^{たねや}蚕種屋と呼ばれた人々のたゆまぬ努力や工夫の様子が見えてきます。

第2部では、重要文化財「伊達の蚕種製造及び製糸・養蚕関連用具」の紹介も含め伊達地方の蚕糸業の様子を振り返ります。

1. 江戸期、伊達地方の^{さんしぎょう}蚕糸業

輸入生糸の制限と伊達地方の蚕糸業

貞享2年(1685)、江戸幕府は、国内の銀が海外へ流出することを防止するため中国産の生糸へ輸入制限を行いました。これに代わる対策として幕府は、国産生糸の生産を奨励します。これにより、桑栽培に適した環境であった伊達郡では、生糸生産に力を入れるようになります。このような理由で江戸時代後期に^{おうしゅうさんしゅほんば}「奥州蚕種本場」の名を使用することを認められるほど成長する伊達の蚕糸業が本格的に始まるのでした。

伊達産の生糸は、^{のぼ}「登せ糸」^{いと}として京都西陣へ送られ、西陣織の原料として使用されました。この「登せ糸」の取引は、伊達郡内で開かれた市により行われました。寺社などの祭礼では、岡の天王市、保原の神明市、梁川の天神市などで生糸が取引され、この他、伊達郡の村々では定期的に開かれた六斎市で生糸の取引が行われました。この市には、京都を中心に多くの生糸商人が集まり盛況を極めました。

文化年間(1804～1818)には、生糸や真綿の販売で金300両の収益を上げた養蚕農家が存在したことが記録されています。当時の繁栄ぶりがうかがわれます。

さんしゅ 蚕種生産と伊達の蚕糸業

江戸時代以前から行われてきた伊達の蚕種生産は、江戸中期に大きな転換点を迎えることとなります。蚕種生産の先進地であった関東・信州方面を襲った寛保2年（1742）の大水害は、多くの桑畑を押し流し、蚕種生産ができなくなったと伝えています。また、国内の銀の流出防止のため江戸幕府により奨励された国産生糸の生産の推進が、伊達の蚕種生産量を押し上げたと考えられます。そして、宝暦～天明期（1751～1788）には、伊達産の蚕種が、関東地方まで売られるようになっていきます。

この流れの中で安永2年（1773）、伊達の地は、幕府より「奥州蚕種本場」銘の使用を許可されブランド化が図られました。良質な伊達の蚕種は、関東を中心に諸国へ販売されていくこととなります。

なかもらげん えもん 蚕種家「中村善右衛門」

蚕を育て良い生糸を取るためには、多くの工程と道具が必要となります。この様子を伝えているのが、重要文化財「伊達の蚕種製造及び養蚕・製糸関連

ようぐ 用具」です。この用具から、蚕種生産から生糸を取るまでの工程などがわかります。しかし、道具だけでは、蚕を育てることはできません。

江戸時代にこの伊達の地で活動した多くの養蚕家は、良質の生糸を取るため蚕の品種改良を行い、同時に蚕を育てる上で必要不可欠な桑の品種改良も行いました。この伊達地方からは、「又むかし」「赤熟」「青熟」など品種改良された蚕種が生産されました。また、桑も改良が加えられ、「市兵衛」「六之丞」といった桑がこの伊達の地で



中村善右衛門 写真

つくられました。伊達地方の蚕種家や養蚕家が活発に活動していたことがわかります。

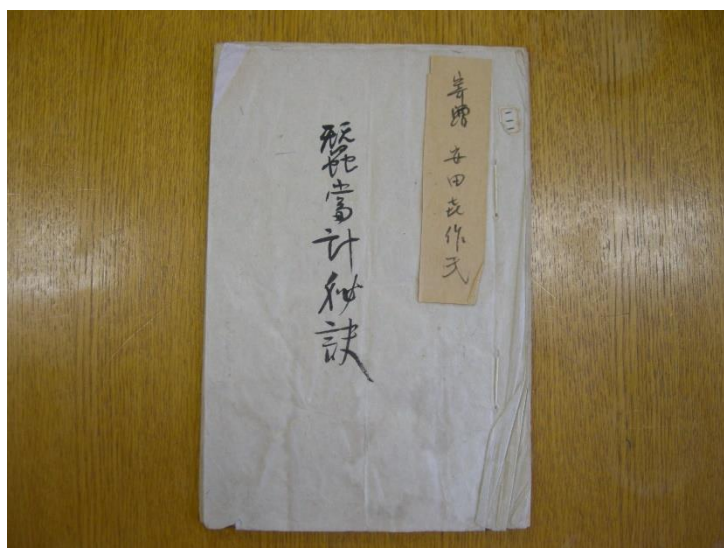
この蚕種家の中に
なかむらせん えもん
中村善右衛門がいました。

善右衛門は、文化3年（1806）ころ、現在の梁川町の蚕種家の家に生まれました。天保10年（1839）に風邪により二本松藩の藩医、稲沢宗庵を訪れた善右衛門は、体温計を見ることとなります。この体温計が、養蚕に活用できないかと考えた善右衛門は、体温計を蚕室に置き、養蚕と温度の関りについての研究を始めたと伝えられます。

その後、温度計の一般普及を目指し、自ら試作品の開発・改良を重ね、



重要文化財 蚕当計



重要文化財 蚕当計秘訣

嘉永2年（1849）、温度計が完成し、名を蚕当計と名付けました。善右衛門は、

蚕当計に解説書となる『さんとうけいひけつ蚕当計秘訣』を付け販売しています。この『蚕当計秘訣』には「この蚕当計を蚕室に備えれば、どのような山奥や離れ島といった僻地であっても、養蚕に最も適した本場の気候と同じにすることができる」「船が蛇行するさいに磁石と同じように、この蚕当計を蚕室の中でのよりどころとして温度を計るようにすれば、どのような天候の不順な年であっても、危険なことは全くなくなる。私は数年来この器具を試用して、標準となる飼育方法を編み出した。それをここで紹介し、百発百中のやり方をお教えしよう」と記しています。中村善右衛門の温度管理による養蚕育成法はその後全国へと波及していきます。

2. 明治期、先進地伊達の蚕糸業

高まる生糸の需要と伊達の蚕糸業

幕末の海外への開港以降、生糸は海外への輸出品の主流となります。明治期もその傾向は続きました。大量の生糸が、横浜へ集積され海外へと出荷されていきます。また、幕末から明治のはじめには、フランス・イタリアで微粒子病が流行し、養蚕業が打撃を受けます。この時、日本産の蚕種がヨーロッパへ大量に輸出されることとなりました。

この需要の高まりとともに伊達の蚕種家なども生糸のブランド化を図ります。掛田の安田利作は、慶応2年（1866）に輸出向けに掛田折返し糸を考案しました。また、明治4年（1871）には、梁川の田口半三郎が蚕種の販路拡大のため約3か月フランスに滞在しています。伊達地方の蚕種家の活発な動きが読み取れます。

現在、このような蚕種家の活動を示すものとして重要文化財「旧亀岡家住宅」が残されています。



重要文化財 旧亀岡家住宅

蚕糸業の先進地、伊達

生糸需要の高まりとともに、養蚕業は、全国で行われるようになります。蚕種本場であった伊達地方は、先進地として多くの視察や受講の要望を受け、全国に多くの養蚕講師を輩出しました。明治14年、安田利作などは、掛田養蚕伝習所を開設し、岩手・岐阜・広島などから多数の生徒が受講しました。このほか、保原では、渡邊源兵衛なども養蚕学校を開いています。

3. 大正～昭和、蚕糸業の衰退と新たな伊達の産業

大正～昭和にかけて盛期を迎えた生糸生産も、昭和50年代には、中国からの輸入生糸に押され、衰退していくこととなります。

これにより、福島盆地に広がる広大な桑畑は、盆地特有の気候風土を生かし、果樹園へ転換していきました。伊達市の特産品である桃、柿などをはじめリンゴ、葡萄など様々な果樹が栽培され現在の伊達市の主力産業となっています。桑が栽培された広大な農地は、今も伊達市を支える大切な農地として引き継がれています。